【ワンダーウォール】

第０９稿

脚本：勝見風太

登場人物

匡介	(19)	主人公・流れ者として西成にやって来た
ユキ	(16)	母親に虐待されていた左手がない少女
ママ	(54)	ドヤ・てとてハウスの管理人
ハチワレくん	(26)	腕っ節の強い日雇い
打ち山さん	(64)	シャブ中・ハチワレくんの日雇い仲間
ですわ氏	(43)	貧困ビジネスマンの元ヤクザ
ハナちゃん	(25)	コカイン中毒の風俗嬢
副業家	(65)	生活保護受給者で地見屋のジジイ
小野	(32)	西成を取材しているルポライター
社長	(52)	大阪の音楽プロデューサー
店主	(77)	リサイクルショップの店主
匡介の父親	(45)	匡介にＤＶをふるっていた
匡介の母親	(43)	匡介を実家から逃した
ユキの父親	(42)	そこそこ売れているミュージシャン
ユキの母親	(38)	離婚のストレスでユキにＤＶをふるう

1

プロローグ

真っ暗な画面。匡介の母親の声が

匡介の母「逃げて、逃げて。逃げて……」

と木霊する。

2

西成　路上（昼）

雑然とした西成の通り、

路上に寝転がるおっさん、街頭に立つシャブの売人に話しかける男、三角公園で怒鳴り合い喧嘩する老人たち。

そんな街を囲うようにそびえる「嘆きの壁」の前を、鳥羽匡介（１９）が、俯いてバイクを押しながら通り過ぎる。

タイトル「ワンダーウォール」

3

西成　てとてハウス・入り口前路上（昼）

燃料切れで動かなくなったバイクを、キックで何とか始動させようとする匡介。しかしエンジンはかからない。

匡介「くそっ……」
と吐き捨てながら天を仰ぐと、「てとてハウス・その日の内に即入居」と書かれた、握りあう手のイラストが添えられた看板が目に入り、年季の入ったドヤが自分の横にある事に気づく。しばらく眺めた後、諦めたような顔で中へ入る。

4

同・1階　ロビー（同）

薄暗いロビーに足を踏み入れると、「受付」と書いてあるテーブルで、左手首のブレスレットをいじっている強気そうな女性・ママ（５４）が匡介を睨む。

匡介「あの。外に即入居、って……」
と、恐々尋ねる匡介に、ママは

ママ「……金は？金あるんか？身分証はいらんけど、金払わん奴には部屋貸せへんぞ」
と低い声で凄む。

		匡介は前に停めてあるバイクを指差して、 匡介「ガス入ってないだけで故障はしてない、売ったらたぶん、1ヶ月くらいの家賃にはなる、と思う……」 と説明する。バイクをジロジロと眺め回したママは「２０２」と彫られたカギを取り出し、匡介に放って ママ「オモテ置いとったら持ってかれるから、中入れとき」 と、ぶっきらぼうに言う。
5	同・２階廊下（昼）	ハウスの薄暗い階段を登り、壁の両側に奥まで扉がびっしり並ぶ２階の廊下に着いた匡介。
6	同・２０２号室（昼）	２０２号室の扉についた南京錠にカギを差して回し、部屋に入って壁にもたれながら座り込み、息を吐く。

その時、壁の向こうからギターの音が聞こえてくることに気づき、壁に耳をつけてよく聴こうとする。
しかしその時、廊下の方から
「わぁぁぁあああああ！！！！」
と叫び声が上がり、驚いて部屋のドアを開けて外の様子を確認する。

7

同・２階廊下（昼）

半開きのドアから恐る恐る顔を出す匡介、騒ぎを聞いて他の部屋の１０人も廊下に出ていた。
廊下の奥で、小柄なジジイ・打ち山さん（６４）をガタイのいい男・ハチワレくん（２６）が締め上げている。ジジイの方は鼻水とヨダレを撒き散らしながら
打ち山さん「ぎぃぃ～～！！バカにしよって
オドレボゲぇ！どこじゃあ！ワシの
シャブどこ隠したんじゃコラぁ！！」

と大声を上げている。呆気に取られている匡介。階段を駆け上がってきたママが、

ママ「なんじゃ！喧嘩やったら外でしぃや」

と叫ぶ、それに対して、匡介の前にいた太った女・ハナちゃん（２５）が、

ハナちゃん「大丈夫よママぁ。打ち山さんがポンプで狂っとるだけやから……」

と、鼻を啜りながら言うと、匡介に気づいて、

ハナちゃん「あらっ、新しく入ってきた人ぉ？ようこそ～てとてハウスへ！」

と人懐っこく笑い、

ハナちゃん「ウチこういう者ですぅ。隣の部屋や～ん！仲良くしようねぇ」

と、匡介に名刺を渡してきた。名刺には「ぽっちゃり専門デリヘル・幕内　四股名・ハナ」と書いてある。

匡介「あ……ど、ども。匡介っていいます」

おずおずと名乗る匡介に、

ハナちゃん「匡介く～ん、よろしくねぇ」

と、手をとって握手をしてから、
ハナちゃん「あっ、皆おるしちょうどええわ。ここに住んどる人らの紹介したげるねぇ」
そう言ってハナちゃんは廊下に居るハウスの面々を匡介に紹介し出す。
ハナちゃん「まず、ここの管理人しとるママね。みんなからママって呼ばれてるからママ」
ママは、「ふん」と腕組みをして、階段を降りていく。
ハナちゃん「で、あそこでヘッドロックキメとるんがハチワレくん、日雇いの解体工で、居酒屋で喧嘩した相手のドタマをビール瓶でかち割ったからハチワレくん」
浅黒い肌にレスラーのような体躯のハチワレくんは、いかつい無表情で打ち山さんの首を締め続ける。
ハナちゃん「で、色々キマっとるんが打ち山さん、ハチワレくんの先輩でシャブの

ドポン中、いつも打ってラリっとるから打ち山さん」
ハチワレくんの腕から逃れようと暴れていたが、やがて力尽き、白目を剥いてガクッと気絶する打ち山さん。
ハナちゃん「で、それを見とる、右のがですわ氏、囲い屋やっとる元ヤクザ、語尾にですわって付けんと喋れへんから、ですわ氏」
匡介とハナちゃんの少し前に立っていた細身のですわ氏が振り返り、
「へへ、よろしくですわ」と笑う。
ハナちゃん「で、左のが副業家、本業は生活保護の不正受給で、競馬場で地見屋もやっとるから副業家」
副業家はこちらを少し見やると、軽く手を上げて、（「よっ」とやる感じ）自分の部屋へ戻って行く。
立板に水のごとく住人たちの紹介をしたハナちゃんに、ようやく落ち着

きを取り戻してきた匡介が、ひとつ尋ねる。

匡介「あ、あの。俺の隣の部屋の人は？」

ハナちゃん「何言うてんの、それはウチ……あっ！２０１号室のほう？」

8

同・２０１号室（昼）

匡介とハナちゃんは２０１号室の前に立つ。ハナちゃんがドアをノックし、

ハナちゃん「ユキちゃ～ん。入るよぉ」

と断って、ドアを開ける。（２０１号室には南京錠はかかっていない）部屋の中では、ユキ（１６）が窓際の壁にあぐらをかいて座り込み、二人には目もくれず一心不乱にギターをかき鳴らしている。ユキの左腕は二の腕の真ん中あたりで無くなっており、右手だけで弾くギターの音はめちゃくちゃだが、力強さを感じる。ハナちゃんは膝をついて、ユキに、

ハナちゃん「ユキちゃん、こちら隣の２０２に越してきた、匡介くんよぉ」
匡介は立ったまま挨拶をする。
匡介「……ど、ども……」
しかしユキは、チラッと匡介の方を見やるだけで、ギターを弾くのをやめない。その態度に、匡介はムッとした表情を浮かべる。

9

同・２０２号室（夜）

切れかけの丸型蛍光灯が照らす自室で、荷物の整理をしている匡介。開けた窓から、酔っ払った人々の騒ぐ声が聞こえてくる。
小さなバックパックをかき回していると、「匡介　高校」と書かれたくしゃくしゃの茶封筒が一枚、底から出てくる。酔っ払いの声が遠のき、封筒をじっと見つめる匡介の脳裏に、「逃げて」という女性の声が響く。匡介は、ドアの下に置いてある自分のスニーカーを手に取ると、中

敷きをめくってその下に封筒を隠す。

10　同・２０２号室（朝）

ヨレヨレのせんべい布団で寝ている匡介。部屋のドアを誰かがコンコンとノックする、目を擦りながらむっくり起き上がってカギを開けると、ですわ氏が立っている。

匡介「あ……おはようございます」

匡介が挨拶すると、ですわ氏はもみ手をしながら、

ですわ氏「おはようですわ。匡介クン、あのね……暇やったら、ちょっと手伝ってほしいことがあるんですわ……」

と笑う。

11　西成　路上・ですわ氏の軽トラの中（昼）

ですわ氏の運転する軽トラの助手席から、西成の街を眺める匡介。三角公園では、朝食の炊き出しの横で老人たちがラジオ体操をしており、反

12

西成　生活保護ビル（昼）

対側の路地では、泥棒市で処方薬を売っていた男が警察と言い合いをしており、その前をシャブ中がママチャリをウィリーしながら、「ひゃっほぉお！」と叫んで角を曲がっていく。それを過ぎると、匡介が前を通った「嘆きの壁」が現れ、それを見上げながら匡介は

匡介「あの壁って、なんなんですか？」

と、ですわ氏に尋ねる。ですわ氏は小指の無い右手でハンドルを握りながら、

ですわ氏「あたしはよく知らんけど、昔遊郭が盛んやった頃の名残らしいですわ。身売りで連れてきた女の子が逃げられへんように、街に壁を立てとったらしいですわ」

そう説明し、ギアを落としてカーブを曲がると、とあるビルの前で停車する。

ほとんど廃墟のようなガランとしたビル、階段を登り、元は事務室だったのだろう部屋のドアを開けると、中は間仕切りでネットカフェのように区切られており、それぞれの個室に老人が丸くなって寝ている。悪臭に鼻をつまむ匡介に、ですわ氏は

ですわ氏「これがあたしの仕事ですわ。今は11人。毎日顔見て、死んでないかチェックして、病気したら医者に連れてって……月初めは役所に行って全員分のナマポをもらってくる。やる事はこんな感じですわ。これを匡介クンに手伝ってほしいんですわ」

と、貧困ビジネスの説明をする。

そこへ、部屋のドアをノックする音がして、男の声で「や、山代さーん、小野です。いますー？」とドアの向こうから呼ぶ声がする。ですわ氏が

ですわ氏「あっ！」

と声を上げてヨタヨタと入り口の方へ走り、ドアを開けて、小柄で小太りの男を中へ入れる。

ですわ氏「すんませんですわ。昨日約束したの忘れてたんですわ」

小野「もー、勘弁してくださいよぉ。一人でここ入るの、すっげぇ怖かったっすよ」

状況を飲み込めてない匡介に、ですわ氏は小野と呼ばれる人物を紹介する。

ですわ氏「こちら、ルポライターの小野くんですわ。この街のことを本に書く言うて、先週からあたしの取材をしとるんですわ。小野くん、こちら、今日からあたしのシノギ手伝ってくれる匡介クンですわ」

紹介され、お互いに軽く会釈をして、匡介はですわ氏に仕事の仕方を教わり、小野はその様子をカメラに撮ったり、ですわ氏にインタビューをしたりする。

13

西成　路上（夕方）

ビルから出てきた匡介、ですわ氏、小野の３人。暮れなずむ西成をバックに、小野が

小野「ありがとうございます！じゃあまたー」

と言って手を振る、それに振り返し、軽トラに乗って路地を曲がっていくですわ氏と匡介。

14

西成　居酒屋（夜）

こぢんまりした居酒屋で、仕事終わりの一杯を楽しむですわ氏と匡介。

ですわ氏「お疲れ様ですわ～」

カウンターでチンとグラスを合わせ、匡介を労うですわ氏。二人で酒を呑みながら、不意に匡介が

匡介「あのライターの人、真面目に取材しましたね。こんなとこの本書いて、売れるんですかね？」

とですわ氏に訊く。ですわ氏は

ですわ氏「あたしも最初はそう思ったんですわ。でも、話聞いてると結構売れるみたいなんですわ」
とチューハイを煽る。匡介は
匡介「そんな本、読みたいんですかね……」
と言いながら、タコの唐揚げを箸でつまむ。それに対してですわ氏が、
ですわ氏「……多分、安心したいんですわ」
と静かに言う。ですわ氏の方を見る匡介に、
ですわ氏「この街の壁は、街の外と中を区切る壁やと思うんですわ。壁の外におる人間と中におる人間は、やっぱり何かが違うんですわ、決定的に違うんですわ。壁の外の、金出して本を買えるような人間は、多分安心したいんですわ。ナンボほど自分の人生がクソやっても、こいつらよりはマシやと思って、安心しとりたいんですわ」
と語ると、店の親父に向かって、
ですわ氏「大将！レモンハイおかわりですわ～」

と、氷だけのグラスをカラカラと振る。そんなですわ氏の隣で、匡介が両手で持ったグラスの縁が、店の照明を反射して輪っか状に輝いている。（暗転）

15

西成　てとてハウス・２０２号室（朝）

遠くからギターの音が近づいてきて、暗転が明ける。２０２号室で匡介が寝返りを何度もうち、枕で右耳を、指で左耳を塞いで丸くなり眠ろうとするが、壁を挟んで聴こえてくるユキのギターが耳障りで、

匡介「……うぅうん！」

と苛立って唸り、枕を抱えて部屋のドアを開け、隣の２０３号室へ行く。

16

同・２０３号室（同）

２０３号室で、ハナちゃんが机に向かって、一回分出したコカインにストローを近づけ、鼻から吸い込もう

としている。そこへノックの音が聴こえ、慌てて粉を袋へ戻し、可愛らしいデザインのポーチに詰め込んでから、ドアを開けて

ハナちゃん「あらぁ！匡介くん～どうしたのぉ？」

と、笑いながら匡介を部屋に迎え入れる。匡介は頭をボリボリかきながら、

匡介「ごめん。あいつのギターうるさすぎてさ……ちょっとこっちで寝かして」

と、畳の上にあぐらをかく。ハナちゃんはそんな匡介に苦笑いを浮かべ、

ハナちゃん「そうやねぇ。慣れへんうちは嫌かもしれへんけど、そのうち気にならんようなってくるんよぉ」

と話すが、匡介は渋い顔。

匡介「……そもそも、なんであんな奴がこんなトコに居るんだよ。どう見ても俺よりガキじゃん。誰かの子供とか？」

そう尋ねられ、ハナちゃんは少し考えてから、開いた窓の桟に肘を乗せて、話し出す。

ハナちゃん「ユキちゃんはねぇ……捨てられてたんよ、ハウスの前に。それをママが助けて、それからみんなでお世話しとってね……」

ハナちゃんの語りの最中、回想で左腕がアイロンのヤケド痕でぐちゃぐちゃになったユキが、ギターと一緒にてとてハウスの前で気を失っているのをママがじっと見ているカットが入る。

ハナちゃん「ここの人らはみんな、人に言えへん辛いこと、悲しいことを抱えてる。死なへん限り逃げきれへん自分から、何とか逃げようと必死に生きてるんやわ」

現在の２０３号室に戻り、ハナちゃんの話を聞く匡介と、コカインの入ったポーチが、それぞれ短く映る。

ハナちゃん「そんな時、ユキちゃんのギター聴くとね、ふーっと不思議な感じになるんよ……なんていうか、ここじゃない、どっか……どこでもないところに、自分がおるみたいな」

そう話すと、匡介の方を振り返って照れ臭そうに笑い、

ハナちゃん「あは、なんかうまく言えへんけど……ウチも、みんなも、そう思っとるんよ」

と話を締めくくる。それを聞いて、

匡介「……ふぅん」

とつまらなさそうに呟き、枕を置いて畳の上に寝転ぶ。

17

西成近辺の住宅街・路上（朝）

小綺麗な生野区の住宅地。不燃物回収の日で、みんなが家の前に雑誌やチラシ、新聞を紐で縛って出している。そこへ軽トラで駆けつけるですわ氏と匡介。ですわ氏が軽トラを停めると匡介が素早く降りてきて、持

てるだけの紙ゴミを抱えて荷台に積む。そうしていると後ろの家から家主のオバさんが出てきて、「コラっ！何やっとんねんお前ら！待たんかい！」と駆けてくる。チラシの束を抱えたまま急いで乗り込み、その場から逃げ出すですわ氏と匡介。

ですわ氏「せっかくの休日をごめんですわ匡介クン。しかしここを逃しては、次回の市場価格はどうなっとるか分からへんのですわ」

次の住宅地へと軽トラを飛ばすですわ氏の横で、匡介は風でバタバタとはためくチラシに頬を叩かれながら、

匡介「あとどれくらい積めそうですかね？」

と、荷台いっぱいの紙ゴミを見やる。

ですわ氏「もう5軒は回れそうですわ！」

そう言いながらギアチェンジをするですわ氏。匡介は頬を叩くチラシがいい加減鬱陶しく、バシッと手で押

さえる。その時、チラシの「骨董本舗・高価買取！ギブソン１９６０最高額１００万円」という見出しが目に入り、写真で載っているギターが、ユキの弾いているギターと同じ品物であることに気づく。（ギターを弾くユキの回想が入る）

18

西成　てとてハウス・２０１号室（夕方）

２０１号室のドアをノックして、ゆっくり入ってくる匡介。いつもとは違い、静かな調子でギターを弾くユキの前に正座をして、おずおずと話し出す。

匡介「え……っと。ユキ、さん……そのぉ、なんていうか……単刀直入に言うけど、さ。こ、こういう事でさ……」

と、骨董本舗のチラシを畳の上に差し出す。ユキを弾くのを止めて、チラシに目を落とす。

匡介「ギターが弾きたいんだったら、１００万もあれば、新品のちゃんとした音の

出るギターが買える。悪い話じゃないと思うんだけど。……そ、それに、そんだけ金があれば、こんな所からも出てって、自分の行きたい所に行ける。だから―」

ユキ「イヤだ」

匡介の話をぶった斬るように言い放つユキ。しばしの沈黙の後、

ユキ「このギターは、あたしが持ってなきゃいけない。これは、神様のギターなんだ」

匡介「……神様の、ギター？」

ユキ「神様が空から落っことして失くしたギター。だからずっと弾いてれば、この音を聞きつけて、いつか神様がやって来て、あたしにお礼をしてくれる。だから、誰にも渡したくない」

そう言って、再びギターを弾き出すユキ。さっきとは違い、激しめのストロークでかき鳴らしている。

		匡介はチラシを握りつぶすように手に取ると、立ち上がり、ユキに背を向けて、 匡介「神様なんか居ねぇよ。誰も助けてくれない、人生は自分一人の力で生きてくもんだ」 と吐き捨て、音を立ててドアを閉め、２０１号室を後にする。
19		同・２０２号室（夜） 真っ暗な部屋。布団の上で横になり、まんじりともせずに壁を見つめている匡介。ふと目を閉じ、暗闇の中で自分の人生を振り返る。
20	回想　匡介の実家・リビング（夜） 実家で父親に殴られている匡介（９）、腫れた目で父親の後ろにいる、怯えた顔で立って見ているだけの母親を睨みつける。	
21	同・匡介の部屋（早朝）	

22

回想　とある街・河川敷　橋の下（昼）

自分の部屋で寝ている匡介（１５）のことを揺り起こす母親。眠い目を擦る匡介に、「匡介　高校」と書かれた封筒を渡し、

匡介の母「ごめん、匡介のこと、高校に行かせてあげたかったけど、お母さんの貯金じゃどうにもならなかった……このままこの家に居たらダメになる。少ないけど、これ持って、あなただけでも逃げて……！」

そのまま、学生鞄に荷物を詰めて、銀チャリで家出をする匡介。父親はまだ寝ている、母親は匡介の部屋で「ごめん、ごめんね。ごめんね……」と繰り返しながら泣いている。銀チャリを必死で漕ぐ匡介に、モノローグで、

匡介「母さん、あんたは悪い人なの？それとも、いい人なの？」

とセリフが重なる。

グラフィックだらけの橋下で、膝を抱え項垂れている匡介。そこへ地元の不良集団がやって来て、匡介に手を差し伸べる。その手を握る匡介。

23

同・郊外の山奥（深夜）

真っ暗な山道、山道の奥に停めてある2トントラックの元へ、匡介（18）を含めた大勢の不良少年が盗んだバイクを押してやってくる。懐中電灯で照らしながら、コソコソと荷台へバイクを並べていく少年たち。トラックはそのまま発進し、夜明けの街へ消えていく、それを山から見送る匡介。

24

同・国道沿いのファミレス　駐車場（昼）

ファミレスで食事を済ませ、4、5人の仲間たちと話しながら店を出る匡介（19）。盗んだバイクに乗ってエンジンをかけた所へ、警官が何人も近寄ってきて、

警官「ちょっといいかな君たち。最近バイクの窃盗が流行っててさ、お話―」
と言いかけた所で、仲間の一人が「逃げろっ！」と叫び、散り散りに逃げ出す。後ろで仲間が取り押さえられているのを見ながら、匡介は一人だけバイクに乗って逃げることができた。曇り空から雨が降り出し、雨粒を顔に叩きつけられながらバイクを飛ばす匡介の脳裏に、母親の母親「このままこの家に居たらダメになる。あなただけでも逃げて……逃げて、逃げて。逃げて……」
という声が反響する。
（回想終わり）

25

西成　てとてハウス・２０２号室（夜）
回想が終わり、再び暗い部屋で寝転ぶ匡介のカット。閉じていた目を開けて、布団から起き上がり、
匡介「今更……どこへどう逃げても、もうどうでもいいだろ」

と、低い声で呟く。

26

同・２０１号室（同）

２０１号室の前で、耳を澄ましてから音がしないことを確認してから、ドアをそっと開ける匡介。ユキは布団の上でギターを抱き抱えるようにして寝ている。一瞬戸惑うが、ユキの手足をちょっとずつずらして、何とかギターを持っていける体勢にすることが出来た。ほっと一息ついてユキを見ると、完全に目が開いていて匡介の事を見ている。

叫び声と、ドタバタと取っ組み合う騒音を聞きつけて、ママがハチワレくんを連れて２０１号室に駆け込んでくる。

ママ「どうしたんや！何しとんねん二人とも！」

ギターを掴んで離さない匡介と、それを抑え込もうとするユキに尋ねるママに、

ユキ「こいつが！こいつがあたしのギター盗もうとした！！」
と叫ぶユキ。他の部屋の住人、ハナちゃんやですわ氏、副業家も廊下から部屋を覗き込んでいる。匡介は混乱しながら、
匡介「違う！違うって！誤解だって！！」
と叫んでいる。
ユキ「何が違うんだよ！離せっ！はなせよ！！」
ユキが匡介の手をギターから引き剥がそうとするが、片手しかない上に力負けしているので取り合いは膠着している。そこでママが
ママ「ハチワレっ！」
と叫ぶと、ハチワレくんが匡介を歯がいじめにして引っ張る。
その時、ギターのネックの部分を掴んで抵抗する匡介の指が、偶然にもコードを押さえ、しがみつくユキの右手が、偶然にも弦を弾き、オアシ

ス「wonder wall」の出だしの
コードが鳴り響く。
皆が息を呑み、匡介とユキも一瞬放
心状態になる。
しばらく呆気に取られていたユキ
だったが、

ユキ「……もっかい……」
と呟き、匡介の腕を取って
ユキ「もっかい、やって。今の。もっかい」
と匡介の目を見つめる、訳が分から
ず戸惑う匡介だが、とりあえずハチ
ワレくんに離してもらい、ユキの言
う通りに、ネックをあべこべに押さ
える。

匡介「えっと……こう？」
ユキが弦を弾いてみるが、さっきの
音が出ない。

ユキ「ちがう！」
匡介「これか？」
ユキ「ちがうな～」
匡介「じゃあ……これ？」
ユキ「あ、惜しい！」

二人でギターを抱えてワイワイやっている後ろで、その他の住人が話している。

副業家「なんや？喧嘩した思たら急に二人でギター弾きだしよって……」

ハナちゃん「ま、まぁええやんか？仲直りしたみたいやし～」

ママ「二人とも！夜遅いんやからもう弾かんとき。あんたらも早よ寝ぇや」

ハナちゃん「はぁ～い」

ですわ氏「おやすみですわ～」

ママの声で、ゾロゾロとそれぞれの部屋に戻っていく住人たち、匡介とユキは、二人で夢中になってギターを弾いている。

27

同・２０１号室（昼）

太陽の光が差し込む２０１号室で、ギターを弾く匡介とユキ。二人でギブソン１９６０を支え、匡介は音楽の知識なんか無いので、かっこいい音が出る押さえ方を試しながら、ユ

キが力強いストロークでそれを音にしていく。楽しげなユキに対して、付き合わされている感マンマンで嫌そうな顔の匡介。

二人の旋律に乗せて、軽トラを飛ばすですわ氏、解体現場で汗水を流すハチワレくんと打ち山さん、場外馬券売り場で友達と話す副業家と、てとてハウスに暮らす面々の日常の場面が差し込まれる。

いつものコカインを吸おうとしたが、やっぱり辞めて２０３号室で二人のギターに耳を傾けるハナちゃんは、ふと目を向けた窓の外、路上で弾き語りをする若い二人組のバンドマンを見つけて、何か考えついたような顔をする。

再び２０１号室。最初は不本意だった匡介も、ユキの夢中な横顔を見ているうちに、満更でもないような表情になっていく。最初のうちはうま

く出なかった音も、次第に滑らかになっていく。
そんな二人の様子を、ママが部屋のドアの隙間から静かに見ている。

28　同・２０１号室（夜）

月明かりが差し込む２０１号室。窓辺で缶ビールを飲む匡介と、布団の上に寝転がってギターに添い寝しているユキ。眠たげなユキがポツリと、

ユキ「……あたしの父さん、ミュージシャンだったんだ」

と言う。缶ビールを畳の上に置いて、ユキの方をそっと見やる匡介。

29　回想　ユキの実家・リビング（昼）

ユキが住んでいた実家マンションのリビングで、ふかふかのソファに並んで座りながら、両親と共に笑い合うユキ（８）。そこに現在のユキのモノローグが重なる。

ユキ「神様のギターっていうのは、父さんが
いつも言ってたの。一生懸命こいつを
弾けば、神様が降りてきて、願いを叶
えてくれるんだって……」
モノローグの後半、ユキの前でギブ
ソンを弾いてみせる父親のカットが
入る。（暗転）

30

同・リビング（夜）

8年後のユキの家。リビングの机に
置かれた離婚届。玄関でユキ（1
6）と母親に深々と頭を下げる父
親。
ユキの父「すまん……高校の学費と養育費は
毎月振り込むから、それで許してく
れ……」
それに対し、ユキの母親は、笑い
合っていた時とは明らかに違う、気
が触れた笑顔で、
ユキの母「ねぇ……それも、ちょうだぁ
い……？」

と、ギブソン１９６０の入ったケースを指差す。戸惑う父親だが、ユキと母親の顔を見て、ケースを玄関に置いて、ドアを閉めて家を出て行く。

31

同・リビング（夕方）

数週間後のユキの家。缶チューハイやペットボトルの焼酎でリビングの床はほとんど埋まり、その中に座り込んだ母親が、ソファに置いたギターに親しげに話しかけていて、それをユキが自分の部屋のドアの隙間から見ている。

現在のユキのモノローグで、

ユキ「それから母さんは、ギターのことを父さんだと思って生活するようになったの」

と説明が入る。

楽しげに一人で会話をしていた母親だったが、急に黙ると、隙間から見ているユキの方を向いて、

ユキの母「……何見てんだよ」
と低い声で呟く。
部屋からユキを引きずり出し、髪の毛を掴んで恫喝する母親。
ユキの母「てめぇが！てめぇがちゃんと媚売って繋いどけば！こんな事にはならなかったんだよ！！てめぇのせいだよ！てめぇのせいで！！」
ユキ「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」
ユキをフローリングに叩きつけて、床に置いたアイロンを持ってキッチンに向かう母親。ガスコンロでアイロンを炙り、それを持ってユキの元へと戻り、ユキの左腕を掴む。
（暗転）

32

同・ユキの部屋（深夜）

火傷でめちゃくちゃになった左腕を押さえながら、自室でぐったりしていたユキだが、起き上がると台所に行き、包丁を取って、リビングの床

	で寝ている母の首元に突き立てようと振り上げる。しかしその時、昔の仲が良かった頃の自分達を思い出し、泣きながら包丁を置いて、ソファに置いてあるギターを抱えてマンションから出て行く。
33	回想　西成・新今宮駅前（朝）
	新今宮駅で降り、よろよろと街を歩くユキ。腕の傷は上着で隠れているが、むき出しのギターを抱えた姿は浮浪者やシャブ売りの目を引く。 ついに力尽き果て、路上に膝をついて倒れるユキ。そこはてとてハウスの前で、買い物に行っていたママが帰って来て、ユキを見つけ抱きかかえる。 病院で目を覚ましたユキ、その右手を握るママ。ママの左手を握り返すユキ。それを見て優しく笑うママ。 （回想終わり）
34	西成　てとてハウス・２０１号室（夜）

ユキ「それで、ママが病院に連れてってくれて。左腕は無くなっちゃったけど、死にはしなかった。母さんは今もあたしのこと探してるみたいだけど、ママがここで、あたしの事守ってくれてる」

ギターを撫でながらそう話すユキのことを、鏡の自分を見るような表情で見る匡介。

ユキ「他のみんなも、あたしのギターを必要としてくれてる……だから、ここを出て行くのは、嫌なんだ……」

匡介「……そうか」

匡介が、ギターのネックに手をそっと置く。ユキもゆっくりと、ネックに手のひらを乗せ、フレットを指でなぞる。（お互いの手は触れ合わない）

少し体を縮めて、寝息を立て始めるユキ。匡介はその様子を見ながら、ビールを一口飲む。

35

同　1階　ロビー（昼）

ハウスのみんなが集まっているロビー。匡介とユキが驚いて大きな声をあげる。

匡介・ユキ「ライブぅ！？」

それに対してハナちゃんがニコニコしながら話す。

ハナちゃん「そ～そ！二人が弾くギターを、もっといろんな人に聴いてもらった方がいいと思うんよぉ」

ですわ氏「それには、外でライブをするのが一番の方法やと思うんですわ」

匡介「で……でも、そんなの、どこでやるんだよ？」

副業家「三角公園とかええんやないか？いろんな奴が歌、うとたりしてんで」

ハナちゃん「決まり決まり！わぁ～楽しみやわぁ」

皆が盛り上がる中、嫌そうな顔の匡介。

匡介「……で、でも、大して上手くもないし、そんなの出来っこな」

ユキ「あ、あたし、やってみたい！ライブ！」
なんとかやめさせようとする匡介を遮って、ユキが叫ぶ、更にヒートアップする一同。
匡介「え……えぇ～？」
と辺りを見回すと、ママがこっちを睨んで、「付き合え」と無言の圧力を放っているのを見て、嫌な汗をかく匡介。だがそこでユキが、
ユキ「……でも、このギター。アレがいるんじゃないの？あの、音出すやつ」
と、アンプを示すように指で四角形を描くと、副業家が、
副業家「あ～……なんか見たことあんなぁ。確か、角のガラクタ屋にあらへんかったか？」
と言う。そこで匡介が、
匡介「じゃあ、俺ちょっと見に行ってみるよ」
と出かけようとする。そこへママが、

ママ「待てや。あそこのジジイ、ガメついんで有名やからな。こいつ連れていき」
と、ハチワレくんの背中を押す。

36

西成　骨董本舗・店の前（昼）

店の前の路上にまで、粗大ゴミと見紛うような商品が積まれた、リサイクルショップ「骨董本舗」。匡介が乗ってきたバイクも、値札がついて置いてある。匡介はそれを横目に、少し緊張しながらハチワレくんを連れて店の中へ入る。

37

同・店内（同）

商品で埋め尽くされた店内に入ると、奥から初老の店主が出てきて、

店主「なんや、なんか買いに来たんか？冷やかしやったら帰れや」
と、不機嫌そうに言い放つが、後ろにハチワレくんがいるのを見て驚き、態度を一変させ、
店主「エへ、エへ。どない致しましょ」

ともみ手をし出す。店内を見渡す匡介。店の片隅に、ケーブル付きのアンプが埃を被って置いてあるのを見つけ、

匡介「あ……あの、あれ、ください」

と店主に指示する。アンプを引っ張り出して来て、埃を拭きながら、

店主「い、今セール中やって、これやったら、そうですねぇ、状態もええですし、半額でどないで……」

と、匡介の方を向くが、その後ろにいるハチワレくんの眉間にグッと皺が寄ったのを見て、

店主「でっでっでっでもぉ！あれっ！？ここ、よぉ～見たらキズあんなぁ！こらいかんわ！値引かな！じゃ～あ……あっ、こらタダやなぁ！にいちゃんッいてますわ～！」

と、精一杯の愛想笑いと小芝居で、匡介にアンプを渡してくる。アンプを抱えて、ぽかんとした表情の匡

介。その後ろで「ふんっ」と鼻を鳴らすハチワレくん。

38

西成　生活保護ビル（夕方）

ですわ氏の仕事の手伝いが終わり、ビルから出てきて背伸びをする匡介。

ですわ氏「お疲れですわ～」

と、ですわ氏がタバコを取り出して、咥えて火をつける。

そこへちょうど、副業家がワンカップ片手にふらふら歩いてくる。

副業家「うぉおい！なんやお前ら、まだ仕事かいな」

ですわ氏「今、終わったとこですわ」

酔いが回り上機嫌な副業家、

副業家「ほうか！ならついて来いや！銭湯奢ったるわ！」

39

西成郊外　銭湯（夜）

銭湯の洗い場で、横並びで座り体を洗う匡介、ですわ氏、副業家の３人。

副業家「今日はええ日やぁ。ツイとったで、大儲けじゃ」

そう言って、喉を威勢よく鳴らしタンを吐く副業家。

匡介「何かあったんですか？」

と聞く匡介に、

副業家「同じ売り場をシマにしとる奴が仕事休みよってな。おかげで馬券独り占めやったんや」

場外馬券売り場で、地面に落ちている馬券を拾い集める副業家のカットが差し込まれる。

匡介「競馬ですか。でも、落ちてるやつなんかハズレでしょ？拾ってどうすんですか」

そう訊く匡介に、シャワーで泡を流しながら、副業家が、

副業家「それがやな……殺し馬券って知っとるか？レースで勝つ馬なんか大体決

まっとるんや、それが気に入らへん奴らがな、『ツイてへん俺があの馬買うたら、あいつコケるやろ』とか考えて、わざと少額、勝ち馬の券を買うんや。勝っても、そんなもん誰も換金せんと捨てるから、ワシはそれを集めてカネにするんや」

と説明する。

匡介と副業家は、洗い場から浴槽に行き、並んでお湯に浸かる。

副業家「そうやってな。なんぼほどの貧乏人でも、金を掌からこぼす時がある。ワシはそんなはした金をかき集めて酒買って酔っとる。貧乏人の中にも上の奴と下の奴がおるんやな、ワシは一番底の方で落ち葉食っとるダンゴムシやな……」

お湯に浸かりながら、ぼーっと遠くを眺めて副業家が話すのを、匡介は黙って聞いている。洗い場ではですわ氏が歯を磨き、口を濯いで床に吐き出す。

排水口の周りに泡が溜まり、白い輪っか状になって見えている。

40

西成　てとてハウス・1階ロビー（昼）

ハウスのロビー奥にあるランドリールームで、古びた洗濯機の蓋を開けて、住人たちの洗濯物を次々と出していく匡介。大きな洗濯カゴにそれらを入れてロビーに持っていくと、ママがすごい速さでそれぞれの住人の分を仕分けし、畳んでいく。

匡介「どれが誰の服か、覚えてるんですか」

驚いて尋ねる匡介に、

ママ「当たり前や、家族みたいなもんやからな」

と返すママ。テーブルを挟んでママの正面に座る匡介。ロビーには二人の他は誰もいない。

匡介「……ユキが、自分のこと、話してくれました」

ママ「……そうか」

匡介「あんたに、すごく感謝してた」

洗濯物を畳む手を止めるママ。

ママ「……アタシは、あの子の母親になってやりたいんや」

そう小さな声で呟いたのを聞き逃さず、顔を上げてママの方を見る匡介。

ママ「あんたとギター弾いとる時のあの子の顔、今まで見たこともないような顔やわ。……ライブ、頑張れよ」

そう続けて、「ほれっ」と匡介の分の洗濯物を、匡介にパスするママ。シャツやパンツを抱えて2階に上がっていく匡介を見送って、テーブルで一人、何か考えるママ。

41

西成　三角公園（昼）

昼下がりの三角公園。浮浪者のおっさんたちが寝転がったり、将棋や麻雀で盛り上がっている。隅っこでは白人のストリートアーティストが、ペールやバケツを何個も並べてバケ

ツドラムのパフォーマンスをしている。
不意におっさんたちが、皆顔を上げて一方向を向く。その視線の先、「KYOSUKE &YUKI GUITER LIVE」と書かれた横断幕を掲げたハナちゃんとですわ氏が公園に入ってくる。その後に匡介とユキが、ギターとアンプを持ち、他のハウスの住人たちと一緒に入ってくる。

匡介「……これだけはやめようって言ったのに……」

と横断幕を見ながら恥ずかしそうにごちる匡介。何事かとゾロゾロ集まってくる浮浪者のおっさんたち。ハウスの面々も、そこに観客として混ざる。それを見て、緊張した面持ちでふっと息を吐き、アンプにケーブルを挿して、匡介と並んでベンチに腰掛ける。

匡介「……いい？」
ユキ「……うん」

匡介がコードを押さえたのを見てから、ユキが力いっぱい弦を弾き下ろす。
音量調整も何もしてないアンプから、爆音が溢れ出し、観客は皆息を呑んで鎮まりかえる。
そのままwonder wallのインストを弾き出す二人。初めはゆっくりおずおず、しかし少しずつ速度とストロークの力強さを増していく。観客たちは左右に揺れたり、首を振ったり、それぞれ思い思いのノリ方で音楽にハマっていく。公園の片隅でドラムをしていた白人も、その熱気につられて、いつの間にか二人の傍にやって来て、二人に合わせてビートを刻み出す。
ユキの右手に合わせて指を変えていく匡介の目には、次第に公園の景色は薄まり、真っ白な空間に自分がいるような感覚になっていく。匡介の左手に合わせて弦を弾き鳴らすユキ

もまた、何もない世界に自分と匡介だけがいるような感覚に引き込まれていく。そして、二人は、ただただ広い、何もない、眩しいくらい真っ白な世界の真ん中で、ひたすらにギターを弾き続ける。

最後の音を弾き、それが真夏の公園にゆっくりと木霊して、ライブは終わる。匡介とユキは、ハッと我に帰り、あたりを見渡す。観客は皆静まり返っていたが、それを破るかのように、打ち山さんがドサッと公園の地面にひっくり返り、

打ち山さん「しゃ……シャブよりも、気ン持ちェエええぇ〜〜〜〜！！」

と叫び、思いっきり小便を漏らして快感に浸る。

それが合図かのように、皆がワーッと拍手をして、歓声が飛び交う。ハウスの面々も、心の底から感動した様子で、それぞれ拍手をしている。

（一人ずつ顔のアップ。ママだけはどんな表情でいるのか分からない。ただ立って匡介とユキを見ている。）

ドラマーは匡介とユキに深々と礼をして立ち去る。匡介とユキは、まだ心ここにあらずといった感じだが、一応皆の賞賛に礼をして、ギターとアンプを片づけ始める。

その様子を、公園の外から見ていたライターの小野が、

小野「マジか〜……！」

感嘆してそう呟くと、携帯電話を取り出してどこかへ電話をかけ。

小野「あ、社長？ちょっ、すごいっすよ！すごいの見つけましたよ！」

と、興奮した様子で誰かと話す。

42

西成　てとてハウス・1階ロビー（夕方）

ロビーに、公園から帰ってきた皆が集まっている。

ハナちゃん「お疲れ～！いやぁすごかった
よぉ～！」
ですわ氏「感動ですわ！音楽のパワーっちゅ
うやつですわ！」
口々に労われ、恥ずかしがりつつ嬉
しそうな匡介とユキ。それを静かに
見つめるママ。そこへ、
小野「あっ、社長！こちらです！ここです、
ここ」
と、小野の声が外から聞こえてき
て、何事かと皆が出入り口の方を見
やると、続いて、
社長「失礼しますぅ。さっき、公園でライブ
やったっちゅうお二人は、いてはりま
すか？」
と、恰幅の良い中年男性・社長（5
2）がハウスの入り口にやってく
る。
少し後。ハナちゃんが冷たい麦茶を
テーブルに置く。それに対して、
社長「あぁ、いや、こりゃどうも……」

と笑う社長。テーブルを挟んだママが、

ママ「……何の用や」

と社長を少し睨む。それに怯まず、

社長「いや、まぁ。単刀直入に言うとね。そちらのお二人、うちの会社で面倒見さしてくれへんかな～ちゅう話でね……」

と言って、名刺をテーブルに置く社長。そこには「MUSIC PRODACTS KANASHIMA」と書いてある。社長の傍に立つ小野が、

小野「つまり、この社長は音楽プロデューサーでして、匡介君とユキさんに、デュオでメジャーデビューしてもらいたいと……」

と説明を付け加える。驚きでどよめく一同。静かな顔つきのママ。

社長「ボクが思うに、音楽は技術よりも魂ですわ。お二人はえ～ぇソウルを持っとるっちゅう事やな。今の時代誰もが、人には言えへん、けど言いたてたまら

ん事を胸に隠しとる。匡介君とユキちゃんのギターはそんなどうッしょ〜もない気持ちを解放してくれる、と思うんやわ」

社長の弁舌を黙って聞く一同。手をつけていない麦茶の氷が、カロンと音を立てて形を崩す。

社長「……それに、お二人には売れる要素が詰まっとると思うな。男と女のコンビやし、何より最高のドラマがあるやないか。この街で生きてきて、ある日急にスポットが当たって……貧困と絶望の中から這い上がった青年と、片腕のない少女が、力を合わせてギターを弾く、ね？エモーショナルなドラマやないですか！」

そこまで矢継ぎ早に言ったところで、ママがゆらりと立ち上がる。

ママ「……なるほど。つまり貧乏人を見せもんにして金取るっちゅう事やな」

と静かに言い放つ。

社長「え？いや、そないなこっちゃなくてね」
と言い訳する社長に対し、
ママ「……帰れ」
と社長を睨みつけるママ。
社長「まぁまぁ、落ち着いてくださいな、何もボク、悪気があって……」
そう言いながらママの方に近づく社長。社長の襟首を掴むママ。
ママ「ふざけんなや！黙って聞いとりゃ都合のええことばっか抜かしよって、ユキも匡介もな、金持ちの食いもんにされる為に生きてきたわけやないんじゃ！ソウルやらドラマやら、余計なお世話じゃボケ！舐めた口で舐めた言葉吐き腐りよって、帰れっ！はよ帰れやコラァ！！」
揉み合いになる二人にオロオロするハナちゃんとですわ氏。止めようと割って入ったハチワレくんに押されながら、社長は、

社長「ちょっちょ、ちょっと待ってよぉ。そんな事言うて、なんなんよあんた。匡介君とユキちゃんの、親かなんかなんですの？」

そう言われ、一瞬固まるママ。社長と小野は出入り口に立ち。

社長「……まぁ、良いですわ。ボクらが手ぇ出さんでも、多分他の会社がどんどんスカウトしに来ると思うで。こんなええネタ、ほっとくわけないわ」

負け惜しむかのようにそう言い、出ていく社長。小野はその後に続き、

小野「……あーあ、『大ヒットバンドを発掘したライター』とかって、仕事増やすチャンスだったのに。んだよ、クソ」

と呟きながら、ハウスを後にする。

気まずそうなハウスの面々、何か考え込んでいる表情の匡介とユキに、ママが、

ママ「気にすんなや、あんなアホ。それより、ほらコレ」

と、自分の財布から万札を出して、
匡介に渡し、
ママ「初ライブの打ち上げ、二人で好きなもん食ってこい」
と言って、奥の部屋に引っ込んでいく。ハナちゃんやですわ氏も、ユキと匡介に労いの言葉をかけながら2階に上がっていく。京介はユキに、
匡介「……と、とりあえず、行くか……」
と声をかけてハウスを出る。ギブソンは部屋に戻さず、ロビーの隅に立てかけたままになっている。
ロビーの奥の部屋で、ママが一人、壁にもたれて。深刻そうな顔で何かを思案し、ブレスレットをはめた手をぎゅうっと握る。

43

西成　すき焼・鍋の「なべや」（夜）
こぢんまりした料理屋「なべや」で、小鍋のすき焼きと牡蠣鍋をつつく匡介とユキ。二人とも何か考えて

いるような伏し目で食事をしていたが、ユキが箸を置いて、

ユキ「……ママはあぁ言ってた、けど……」

と匡介の方を見やる。匡介も、

匡介「……うん」

と食事の手を止める。

ユキ「……あたし、音楽やってみたい。ミュージシャンしてれば、いつかパパにまた会えるかもしれないし……」

匡介「そうだな。俺も、それがいいと思う」

匡介はそう言って、コップのビールを一口飲む。

ユキ「何？その言い方、自分は関係ないみたいじゃん」

匡介「え？いや、そんなつもりじゃ……」

ユキ「……一緒に、来てよ。一緒にやろう」

匡介「……そうだな。一緒にやろう」

そう言葉を交わすと、目を逸らして別々に少し笑う二人。

急に場面変わり、西成の街を息を切らして走る誰かの主観ショットが一瞬入る。

匡介「……あの時さ」
ユキ「うん？」
匡介「あの公園のライブの時。あの時……俺たちは……」
匡介がそこまで言ったところで、なべやの引き戸が勢いよく開き、汗まみれのハナちゃんが飛び込んできて店内を見渡して、匡介とユキを見つけると、
ハナちゃん「あっ、いた！二人とも！すぐ来て……ギターが……！」
と、息も絶え絶えに叫ぶ。

44

西成　てとてハウス・1階ロビー（夜）

ハナちゃんがハウスに戻ってくる。それに続いて匡介とユキが入り口に立つと、ロビーを照らす青白い蛍光灯の下に、ママを含めたハウスの皆が集まって輪を描いており、その輪の中心に、見るも無惨に叩き折られたギブソンが横たわっていた。呆然

とその光景を見る匡介に、ハナちゃんが、
ハナちゃん「2階におったら、すごい音がして、降りてきて見てみたら、もうこんな状態で……」
と言う、それに続いてですわ氏が、
ですわ氏「……あの社長がやりおったんですわ……」
それに続いて副業家が、
副業家「スカウト断られた腹いせに……最低や、あいつ！」
と吐き捨てる。ハナちゃんが、
ハナちゃん「ごめん、ごめんねぇ……ウチがちゃんと部屋に戻してへんかったから……もう二人のギター、聴かれへん……」
と泣き出す。起きている状況が整理しきれず、ただギターを見つめている匡介だったが、ユキにシャツの裾を引っ張られ、ユキの顔を見る。
ユキはただ一点を目を見開いて見つめており、何かとその視線の先を

追ってみると、折れたギブソンのネックの下、ちぎれたママのブレスレットが、落ちているのを見る。

愕然とする匡介、そのまま視線をあげると、ブレスレットの無いママの手首が目に入る。ゆっくりと視線を上げ続け、ママの表情が見える寸前、ユキが勢いよくハウスから飛び出し、そのまま夜の西成に駆け出していく。

匡介「あっ……お、おい！待て！ユキ！」

匡介はそれを一人で追いかける。ギターの影で、崩れた円を描くビーズのブレスレットが、蛍光灯の光を反射して鈍く光る。

45

西成　三角公園（夜）

街灯の灯りがチカチカと揺れる三角公園。夜も遅いため、浮浪者たちは出回らず、ビニールテントからはイビキが聞こえる。そこへ走ってくる

ユキ。公園の真ん中あたりで止まる。京介も少し遅れて追いつく。
ユキ「っ……なん、で。なんで、なんでっ、なんでっ……」
ボロボロと落ちる涙を拭いながら、しゃくり上げて「なんで」と繰り返すユキ。追いついたはいいが、そんなユキにどうしたものか分からず立ち尽くす匡介。公園の隅のテントから、浮浪者の一人がぬっと顔を出すが、二人を見ただけでゆっくりとテントに戻る。おずおずとユキに近づき、震える背中をさする匡介。まだ「なんで、なんで」と小さな声で繰り返すユキに、
匡介「俺は、分かる。なんでか。でも、今は言えない。言いたくない」
俯いてそう言い、一拍置いて苦しそうな表情で、
匡介「……信じたくない……」
と、絞り出すように呟く。そのセリフの直前に、病院でユキの手を握る

ママの笑顔と、洗濯物を畳むママの手のカットが回想で一瞬入る。
目を擦りながら、項垂れたままユキが、

ユキ「ギター、もう弾けない……神様、もう来てくれないよ……」
と言う。それに対して、

匡介「……うぅん。違う。ユキ、神様はもういたんだ。見えなかっただけで、もうそこにいて、ユキをずっと助けてたんだよ」
その言葉に、顔を上げるユキ。

匡介「だから……俺がここに来て、ユキと出会って、あのライブが出来たんだよ」
そう言われ、匡介の肩にそっと手を乗せるユキ。やがて、ゆっくりと背中に手を回して、匡介を抱きしめる。

匡介「あのライブの時……あの時、俺たちは、この世界の、どこでもないところにいたよな……」

目に涙を溜めながら、静かにそう言う匡介。そのセリフに、真っ白な世界でギターを弾く二人の回想カットが重なる。

ユキ「……行こう」

不意なユキの言葉に、ゆっくり体を離してユキの顔を見つめる匡介

ユキ「ここじゃない、どこでもないところ」

涙の跡はあるが、眼差しにはさっきのような弱さはない。そんなユキの表情を見て、

匡介「……うん、行こう。一緒に行こう」

とうなずく匡介。

46　西成　てとてハウス・入り口前路上（早朝）

夜が明ける前の西成。ハウスの前に立つ匡介、ユキの姿は無い。

47　同・２階廊下（同）

ユキの荷物と自分の荷物を持って、廊下に立つ匡介、２０２号室の南京

錠には鍵が刺さったままになっている。
そのまま廊下を奥に進み、２０４号室のドアをノックする。しばらくして、あくびの声と共にドアが開き、ですわ氏が眠そうな顔を出す。
ですわ氏「あら、匡介クン。おはようですわ。昨夜は大変だったんですわ、あの後……」
匡介「頼みたいことが、あるんです」
そう言われ、一瞬ぽかんとした顔を浮かべるですわ氏だが、自分をじっと見つめる匡介の真剣な眼差しを見て、察したような、寂しげな表情になる。
部屋の中で自分の財布を探るですわ氏。
ですわ氏「えーと……あ、これですわ」
ライター小野の名刺を引っ張り出して、匡介に渡す。

ですわ氏「小野くんは、性格はアレかもしれへんけど、仕事はちゃんとやる男ですわ」

匡介「……ありがとうございます」

名刺に印刷された電話番号と住所を見ながら、匡介は小さな声で礼を言う。

ですわ氏「……がんばれよ」

不意にそう言われて、驚いてですわ氏の顔を見る匡介、ですわ氏は少し笑って、そっとドアを閉める。

48

西成　路上（早朝）

ハウスから出てきた匡介。それを見て狭い路地から出てくるユキ。ユキの荷物を肩から降ろし、本人に渡して、

匡介「……行くか」

と言って、駅の方へ歩き出す。

道中、道端で眠る浮浪者や電柱の下でしゃがんでタバコを吸う手配師。

泥棒市で廃棄の弁当を売るじいさん

達を見る匡介。脳裏にてとてハウスの住人たちの顔が次々に浮かんでは消える（回想カットバック）。
たまらずに下を俯くと、裾を掴むユキの右手が目に入り、それを見つめて気を紛らわす。路上の電灯が消え、朝日が少しずつ街を照らしていく。

49

西成　新今宮駅・改札前（朝）

改札前の券売機で切符を買う匡介とユキ。匡介がスニーカーの中から「匡介　高校」の封筒を出して、その中の金で切符を買う。
眩しい朝日が差し込む新今宮駅のホームで、座って始発を待つ匡介とユキ。
「まもなく電車が参ります」のアナウンスがホームに響き、ユキと匡介はベンチから立ち上がる。

ユキの右手と匡介の左手が、お互いにお互いを握るか握らないかのところで、シーンが暗転する。

（了）